

どこまで書くのか

軽度障害当事者として、研究者として

大阪市立大学大学院都市文化センター
UCRC 研究員 秋風 千恵

1. 目的

近年の、「当事者研究」は一定の地位を占めるようになった。研究報告、また著書等を概観すると、その数は年々増えているように思われる。そして、報告また著書等で当事者自身が自身の経験を研究資料として提示するのが常となっているようである。しかし、自身の経験を自身で検証することがどこまで可能なのか、出て来たデータの信憑性は、といった問題が残るかと思う。

そこで、「フィールドワーカーとリスク——どこまで参加するか？／どこまで書くか？」というこのセッションでは、研究者としてどこまで書けるのか、書いてよいのか、書くべきなのかという問題に迫ってみる。

2. 方法

筆者は 2013 年 3 月、ハーベスト社より『軽度障害の社会学—「異化&統合」をめざして』を出版した。拙著において研究対象は、障害の重/軽に関わらず身体に障害を負っている人々であった。ただし、重度障害者については研究の蓄積が充分にある。したがって、拙著が調査対象として重きを置いたのは、主に自身の障害を重い障害ではなく軽い方に入ると考えている人、及び身体的障害自体は重くとも日常生活に介助がほとんどいらぬ人である。彼/彼女らを軽度障害者と称し、その生活史を聴き取り調査し、これを分析することによってその意味世界を浮き彫りにした。

しかし、この本を著すに際し、軽度障害当事者である筆者自身の経験は含まないできた。実証研究を行うには私情を避けることが重要であるといったアドバイスもあり、自身の経験がデータの読みをゆがめるかもしれない事態は避けたかったからである。

本報告では、拙著執筆の際の筆者の考え方、現在多くの当事者研究に見られる研究者自身の経験の扱い方等を、比較検討することによって当事者はどこまで書いてよいのか、書くべきかを検証する。方法は主に文献調査による。

3. 結論

2013 年 6 月、拙著の発表から間もなく合評会を行ってもらおうという貴重な機会をいただいた。そのときふたりの評者や会場からご意見をいただき、研究者自身のライフヒストリーの扱い、分析の妥当性やデータの提示の方法を巡り、議論が盛り上がった。しかし、筆者自身としては、未消化な部分も残った。

研究者として自身の経験をどこまで書いてよいのか、書くべきなのか、現段階でまだこの問題に結論をだせていない。10 月に報告するまでの数か月の間、検討し続けることとなる。当日のセッションが終了する頃には、筆者にも明確な結論が見いだせているだろう。